女性の大学院留学生はどのように日本留学を開始、継続、終結するのか

鈴木寿子
早稲田大学 日本語教育研究センター

The Life Course Process of Foreign Female Graduate Students in Japan

Toshiko SUZUKI
Waseda University; Center for Japanese Language

The purpose of this paper is to investigate how foreign female graduate students begin, lead, and leave behind their lives in Japan. Five students who majored in Japanese as a Second Language and other related academic fields were interviewed and the interview transcripts subsequently analyzed using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA). The analysis results indicated that these students began their lives in Japan with support from their homeland?in the form of help from family members and teachers?and by their own desire for learning.During their time in Japan, they were able to improve both their daily lives and academic skills. The results also revealed that their lives were conducted in the additive mode because they improved over time. However, their capabilities to achieve economic independence and conduct life-stage planning were less stable. They were therefore unable to determine long-term goals and often stayed only temporarily in Japan.

keywords : Language Ecology; M-GTA; Female Life Course; Japanese as a Second Language Major

研究背景

国際交流基金（2011）の調査によると、日本語教育は海外16,045機関で実施され、日本語学習者数は約398万人、日本語教師数は6万人を超えている。なお、日本語を母語としない、いわゆる非母語話者日本語教師は全体の72%を占める。海外日本語教育の今後の発展のためには、日本語を母語とする母語話者教師のみならず、非母語話者教師の優秀な日本語教育実践者や研究者を育成することが不可欠であり、日本語教育専攻を持つ日本国内の大学院がその育成に当たっている。実際に、日本国内の大学院が提供する日本語教育専攻の修士課程、博士課程に在学する学生のうち、留学生の占める割合は高い。例えば、国内最大規模の日本語教育専攻の大学院である早稲田大学大学院日本語教育研究科では、修士課程・博士課程に在学する156名のうち、3分の1に当たる51名が留学生である（早稲田大学日本語教育研究科2013-2014パンフレット）。

2008年に留学生30万人計画を策定した日本政府は、「大学院への留学生については、近年増加傾向にあることや、優秀な人材の大学院への受入れを重視する立場からも、一層留意していく必要がある」として、大学院留学生の受け入れに意欲を見せている。そして留学生30万人計画の実現を目指した「国際化拠点整備事業」、いわゆるグローバル30（文部科学省2014）では、英語による授業のみで学位が取得できる大学院のコースなどを設置し、留学生の獲得に努めている。

他方、日本語教師や日本語学研究者を育成する大学院では、日本語そのものを研究対象とすることや、日本語による文献調査やデータ分析などが必須となるため、グローバル30で展開されているような、英語による授業のみで学位が取得できるコースは実現しがたいと考えられる。そのため、留学生は日本語での高いアカデミックスキルを要求されることになる。学の水準の確保のためには、留学生の学術研究上の負担を減らすなどの措置は安易にとるべきではないが、留学生が日本での学位取得を実現可能と認識できることは、世界規模で見た今後の日本語教育の発展のためにも欠

Copyright 2013. Ochanomizu University. All right reserved.

かせないことであると考えられる。

しかしながら、日本社会や各大学が両手を広げて留学生を迎え入れようとしたところで、留学生本人に意思が芽生えることがなければ、当然ながら留学には至らない。多かれ少なかれ留学生には、経済状況、健康状況、出身国や家庭の諸々の事情等、留学に至るまでの葛藤があることは容易に想像できる。加えて、現在日本には、東日本大震災、原発事故の余波、先行き不透明な経済状況など、見通しのつけがたい困難な社会背景がある。

修士号取得を目指した留学の場合、通常、最短でも2年かかる。困難な社会背景の下で留学を継続するのは並大抵のことではない。日本に留学すること、留学を継続するということは、刻々と変わる国や個人の状況に、留学生各人が自分なりの折り合いを見つけ出す過程でもあろう。留学生本人の留学の経緯や継続への思い、帰国を決意する認識のありようや、留学に対する認識の変化の過程を知ることが、留学生を支援する者には必要であると考える。本研究は、こうした問題意識から着手したものであり、特に日本語教育、その周辺領域を専攻する大学院生に絞って論じていく。

理論的枠組み

本研究では、留学の当事者である留学生の認識を見ることにより、留学生本人にとって留学生活がどのように認識されているかを検討していく。そのための理論的枠組みとして、言語生態学（Haugen,1972；岡崎 ,2009）を用いる。言語生態学では、「言語生態と人間生体の一体化」、すなわち「言語のあり方のよさは人の生き方のあり方のよさ」という考えを支持し、言語の状態がよい状態にあるのは、言語活動の起こる人間活動がよい状態にあるからだと説明する（岡崎 ,2009：xv）。日本留学中の留学生の状況で言えば、留学生の言語の使われ方の状況を見ることが、留学生の生き方のよさがどの程度実現しているかの指標になる。人間にとって、言語は思考を深め、他者との関係を築く上での要である。さらに、留学生は、母語の礎の上に第二言語としての日本語を築いていく。留学生にとって言語は、生活するため、研究するための力を構築していくためのツールでもある。

また、言語生態学は、一般的な言語科学が、言語の記述や分析を学の範疇としてきたのと対照的に、学の目的を、言語の記述、分析、保全、育成とする（岡崎 ,2009：5）。言語の保全や育成は、言語教育や言語政策のかたちで行われる。例えば、1970年代に急速に移民国家化したスウェーデンでは、移民の生活にかかわる以下のような諸政策をとり、移民の生態の保全を実現した。移民家庭で親子の時間が確保できるだけの勤務時間を保障する労働政策、移民と地域住民の言語交流を可能にするための住宅政策、母語教育などの社会援助政策などである（岡崎 ,2009：17-19）。現状の日本の場合、上述のような政策はなく、外国人住民が必要なサービスを受けられず情報弱者の立場に追いやられる事態も生じている（山田 ,2005）。本研究で行う留学生に対する研究は、このような事態を改善するべく、日本における言語政策に資するための基礎的研究として位置づけたい。日本が受け入れてきた、ニューカマーと呼ばれる定住志向の外国人住民に対する福祉・行政サービスの不備が取りざたされる中で、このままでは、留学生30万人計画のような新たな定住者層を生み出す可能性に開かれた政策は、社会的困難を抱えた層を生み出すことにもつながりかねない。移民受入国としての日本の今後の議論のために、留学生当事者の声を取り上げることは重要であると考える。

先行研究

本研究では、留学生が女性である場合を考えてみたい。なぜ女性の大学院生を対象とするのかは、以下の理由による。

第一に、女性の大学院留学、特に高度専門職を育成する博士課程の留学には特有の困難があると考えられるからである。日本に留学する大学、大学院、短期大学、高等専門学校、専修学校、準備教育課程を含めた留学生の男女比（日本学生支援機構 2013）は、男性51.2%（70,518人）に対し女性48.8%（67,238人）で、ほぼ半々といえる。このうち大学院に絞るとどうだろうか。こちらも、男性51.1%（21,391人）、女性48.9%（20,430人）とほぼ等しい（総務省統計局 2013）。他方、課程別でみると、修士課程では男性47.5%（11,835人）、女性52.5%（13,060人）と、わずかながら女性の割合が多い。しかし博士課程になると、男性56.6%（8,564人）、女性44.4%（6,578人）と、割合は逆転する。

大学院生の男女比に関して、英国の大学院における日本人留学生を対象とした考察がある。西尾（2003）によると、ドクターコースの女性の留学生が少ない理由は、学位が必要とされる職が研究職など限られるこ

と、時間・体力・費用等のコストが高く留学生にとって負担が高いこと、結婚や出産の時期とも重なり、育児や家事の負担が大きいことなどを挙げている。こうした理由が日本に留学する女性の留学生にも当てはまるとするならば、女性の留学生の博士課程進学が可能となるためにはどうしたらよいのかを考える必要がある。

第二の理由は、筆者の立場にある。筆者はこれまで多くの女性の大学院留学生に接してきた。彼女らの留学生活に身近に接し、研究の世界で学ぶ彼女らが、同時に、恋愛、就職、結婚、出産といった人生の出来事を経験していく様子を見てきた。Cross（1981）が提示したライフサイクル上の課題を紹介しているCranton（1992=1999：51-52）は、近年、生き方が多様化している女性にそのまま適用はできないとしながらも、「18～22歳：巣立ち（家族からの独立等が課題）」、「23～28歳：おとなの世界への移行（最初の人生構造を形作ること等が課題）」、「29～34歳：安定性への探求（長期にわたる目標を据え、努力すること等が課題）」などといったように、ライフステージ上の出来事と、その発達段階での課題の関連性を指摘している。母国で大学を卒業し、日本に来日した女性の大学院留学生の場合は20代後半に当たっており、家族から独立し、成人として独り立ちする時期でもある。従来の留学生研究では、異文化適応面や言語発達面が取り上げられることが多かったが、女性の大学院留学生は恋愛、結婚、家庭、仕事、人間関係などにおいても、各々の発達課題に取り組んでいる主体的存在なのであり、女性の留学生の生活者や、発達主体としての側面に光を当てた研究に取り組む必要がある。

筆者の知る女性の大学院留学生について言えば、修士課程で留学の継続に悩み、帰国していく人も、博士課程まで修了し、日本で就労する人も見てきた。その選択は多様である。共通して言えるのは、いずれも葛藤の中で、帰国や日本在留の決断を下しているということである。筆者は以前、女性の大学院留学生と共同研究を行った（鈴木・張2011）。それは、女性の大学院留学生の声を示すことを目的として、日本に9年にわたって留学中の1名の女性の大学院留学生の留学の意味づけを分析したものである。分析の結果、思うように進展しない日本での研究生活に悩む現在の自己イメージと、母国で順調にライフステージを進め、社会生活を営む仮想の自己イメージとの間に乖離が生じ、「女性としていかに生きるべきか」の問いに悩み、自己認識が「浮き草」のように根を持たなくなる女性の大学院留学生の姿が浮き彫りになった。一方で、鈴木・張（2011）は認識形成の過程については焦点を当てていないため、女性の大学院留学生の認識がどのような過程を経て形成されるのかは残された課題となっている。そこで本研究は、女性の大学院留学生の留学の開始、継続、終結に着目する。留学生本人の視座からの知見を汲み出した鈴木・張の立場を継承し、当事者の声を反映した研究を目指す。

研究の概要

研究目的と方法

本研究では、日本語教育及び日本語学の領域を専攻する女性の大学院留学生が、いかに留学を選択、継続、終結させていくのかを明らかにすることを目的とする。ただし留学には個人によって異なる様々な事情があることは明らかであり、結果を一般化して示すことは困難である。そこで、現場に知見を還元するために、留学生本人の声を拾い上げることをも目指していきたい。そこで個別の状況の中での選択がどうあったかを、留学生の語るストーリーの文脈を考慮して見ていくことを志向し、人々のアイデンティティや生活世界、ローカルな文化や社会を理解するためのライフストーリー研究（桜井・小林,2005：7）に倣い、本研究では少人数の研究対象の語りを丁寧に検討する。

本研究では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下,2003）を用いる。M-GTAはデータに密着（grounded on data）した分析から独自の理論を生成する質的研究法である。特定の社会空間における人間の社会的相互作用に関係し、プロセス性を持った現象を研究対象とする（木下,2003：89-90）。M-GTAを採用したのは、現場の限定性や、筆者自身の問題意識や実践領域、結果の現場還元という点から本研究に適していると考えられたからである。

言語生態学を理論的背景として用いるに当たり、分析テーマを、日本語教育、その周辺領域を専攻する女性の大学院留学生の留学の開始、継続、終結における生態の変化のプロセスと設定する。インタビューでは彼女らの留学のこれまでの展開を回想することを促し、留学の各時点での生態がどうであったか、当事者としての語りを聴き取ることを心掛けた。

研究対象

インタビューは5名の女性の大学院留学生に対し

Table1 研究協力者一覧

名前	所属・学年	出身・母語	滞日年数	専門	備考
ターニャ	A 大学院 修士 2 年	ロシア ロシア語	3 年	日本語教育学	母国で社会人経験あり 国費留学生 修士課程修了後帰国予定
佳君	B 大学院 修士 2 年	台湾 中国語	2 年半	対象言語学	高校・大学時代に日本留学経験あり 修士課程修了後帰国予定
娜莉	A 大学院 修士 2 年	中国 中国語	3 年半	日本語教育学	既婚（中国人の夫） 進学か就職か検討中
秋月	C 大学院 博士 1 年	中国（内モンゴル） モンゴル語	4 年半	心理言語学	A 大学院修士課程修了後、C 大学院博士課程に入学
桂花	A 大学院 修士 2 年	中国 中国語	4 年半	日本語教育学	母国で社会人経験あり 博士課程進学志望

て、2011 年 6 月から 8 月にかけて行った。研究協力者の情報を Table1 にまとめた。名前は仮名である。全員 20 代の女性であり、東京及び近郊の A 大学院、B 大学院、C 大学院に在学している。5 名とも日本語を使って生活、研究を行っており、高い日本語力を保持している。インタビューに使用した言語は日本語である。インタビュー時間は 1 時間から 90 分程度であり、B 大学院で行った佳君さんのインタビューを除き、A 大学院の教室を使って行った。

この 5 名の状況は、修士課程修了を約半年後に控え、帰国を決定している 2 名（ターニャさん、佳君さん）、博士課程進学を検討している 2 名（娜莉さん、桂花さん）、学位取得を目指し博士課程在学中の 1 名（秋月さん）となっている。全員が 2 年以上前に留学を開始させ、帰国時期を検討してきた経験を持つことから、留学の開始・継続・終結を見るという本研究の目的に即して適合すると考えた。

インタビューでは、日本語教育を専攻した理由や、日本に留学するまで、そして日本に留学してからのふり返りを語ってもらった。その上で、現在の日本生活（大学院での生活、学業・研究以外の生活および留学を終えた後のこと（修了後、就職、10 年後、20 年後のイメージ）を尋ねた。上述のことを半構造化インタビューで聴き取り、上に挙げたこと以外でも自分にとって大切に感じられることを語ってもらった。インタビュアーとなった筆者は、協力者の自由な語りをさえぎらないことを心掛けた。佳君さんとはインタビュー時が初対面であったが、他の 4 名とはインタビュー前から面識があった。しかし留学の経緯などを尋ねるのは初めてのことであった。協力者には本研究の目的を伝え、匿名化した上で研究として公表することについて同意を得ている。

結果

結果図

生成された 12 の概念は 4 カテゴリーに包含され、概念とカテゴリーの関係は Figure1 の結果図に表された。以下のような留学への意味づけの流れが明らかになった。以下、概念は〈〉に、カテゴリーは【】に入れて示す。

女性の大学院留学生は、【留学前の生態環境】で〈学ぶことへの価値づけ〉、〈師との出会い・方向づけ〉、〈家族との信頼関係〉を得ており、これらに後押しされて留学を果たす。日本の大学院に進学し、形成する【留学中の生態環境】では、〈研究上の不安〉や〈生活者としての不安〉を抱えるものの、時間の経過とともに〈研究上の発達〉や生活者としての発達を遂げ、不安は徐々に解消され【生態の加算的な状況】を構築していく。時間の流れの中で彼女らは、〈ライフステージ上の自立〉、〈経済的自立〉もある程度果たしていく一方、母国を離れ留学生として日本で生活をする上で、〈ライフステージ上の課題〉や〈経済的課題〉は留学期間中に一時的に先送りはできても、根本的な解決が難しく、それを【生態の減算的な状況】として抱える事態となっていた。その結果、留学生活で得た成長と、未達成の課題のバランスの間で、自らの留学を一定の期限で完結させる意識が生まれ、学業修了後は帰国が現実的であるとして〈期限付きの留学〉を終えようと考える認識のプロセスが浮かびあがった。

次の節では、各概念について詳述する。なお、これ以降の文中で「留学生」とは、特に断りがない場合、

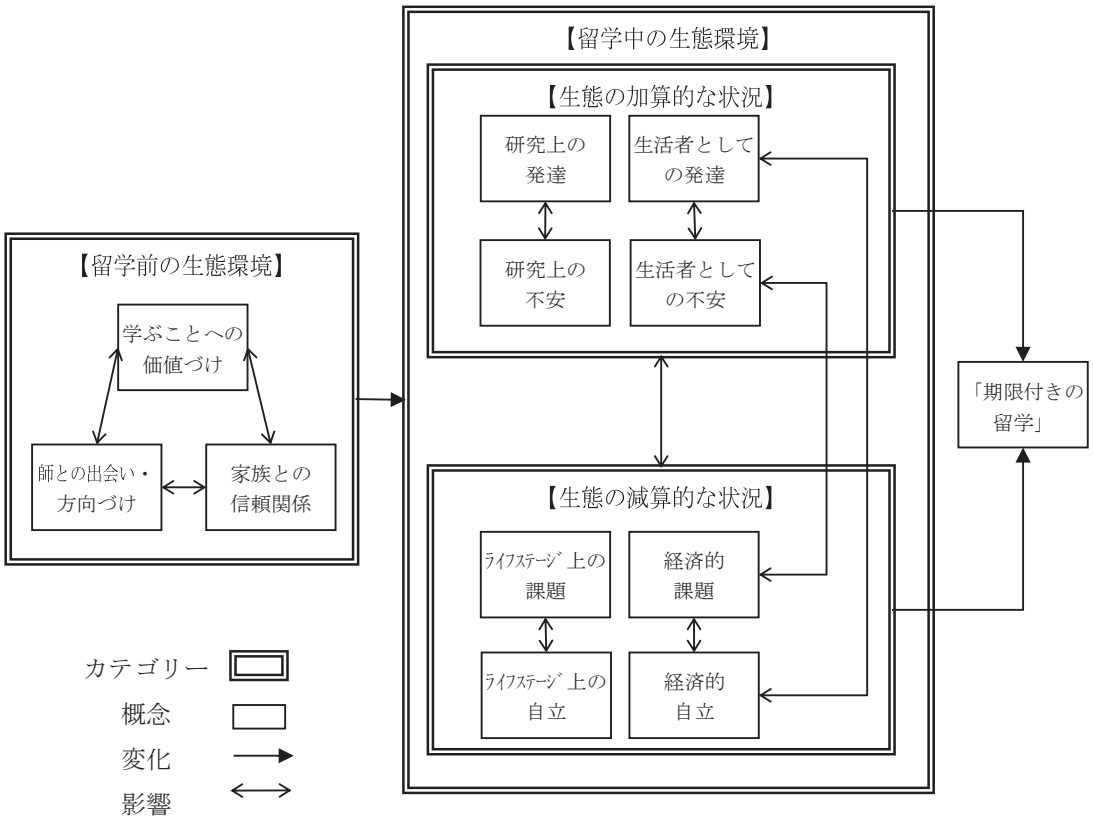

Figure1 日本語教育及び周辺領域を専攻する女性の大学院留学生の日本留学のプロセス

本研究で研究対象とした「女性の大学院留学生」を指すものとする。

【留学前の生態環境】

このカテゴリーには、〈学ぶことへの価値づけ〉、〈師との出会い・方向づけ〉、〈家族との信頼関係〉、の3つの概念が入る。これらは、留学生が留学前に母国で培っていた価値観や認識、人間関係を示すものであり、3つの概念は相互に影響を与え合う関係にある。

以下、それぞれの概念の具体例となる語りを引用し、これらの概念がどのようなものであるかを述べる。補足が必要な個所は、適宜補って示す。また、引用中の人名は仮名である。

〈学ぶことへの価値づけ〉

・大学院に行こうというのは、就職したあと自分が決めたことなので。日本語は専攻なんですけど、周りの人は「あなた専攻は何ですか」って聞いた時は「日本語です」(と答える)。(中略)仕事のときは上司は日本人なんです。たまに周りの人が、「桂花さん、あなた(日本語で)このように言ってください」って言ったときは、どうやって日本語を使って伝えようと思って。それは難しかった。なぜというと、私、勉強したものとか会話授業で勉強して暗記したものは全然使えないんです。(桂花)

・今までいつも成績はトップだったっていうのもあれなんですけども、自分が自信満々なので、大学院を出ようと思ったんですよ。(留学のための試験を)受けようと思ったら、それが国費と私費の2つがあって、(自分は)絶対国費に行くと思ってた。それはすごい思い込みで、結果が出たら、私費になった。普段自分より全然(成績の)低い同級生が国費に受かって、何だと思って。私費ならもう1回受けようかと(思っていたら)先生にすごく言われちゃって、「君は私費のままでいい」とか「何回受けてもダメだよ」って言われて。すごく頭にきて、「ならば私(私費で)行きます」と言って。(秋月)

留学生本人が、留学を選び取る前までに培ってきた向上心がうかがわれる語りである。大学で日本語を専攻した桂花さんは、大学院への留学のために仕事を辞めている。桂花さんは会社で通訳の役割を担っていたが「勉強したものとか会話授業で勉強して暗記したものは全然使えない」ことに危機感を感じたことが留学を決意するきっかけとなった。また、秋月さんは、もともと成績がよく、自信を持って受けた国費留学生の選抜試験に落ちたことによって奮起し、留学に踏み

切ったことを語っている。

〈師との出会い・方向づけ〉

・この（日本語）クラスを担当してらっしゃった先生は本当にえらい人（中略）だったし。（中略）その人の影響で本当に日本語にも興味を持つようになりました。最初は日本、日本語以外にもかなりいろいろ話してくれたから。日本に実際に行ったことはない人だったのに。でも経験も豊富だし、本当に知識がすばらしい記憶力があって、何でも覚えている気がしてますので、いろんな自分自身の経験について話してくださったので、最初は夏休みの時だけに行こうと思ったコースだったのに、10年間結局ずっと通ってたんです。（ターニャ）

・国の大学院に入ろうとしたんですけど、（B 大学院の）小川先生に、「大学院に進学しようと思ってます」とメールしたら、じゃうちの大学院に来ないか、というアドバイスをくれました。（佳君）

本研究で研究対象となった留学生たちは、目標となり、進む道を示してくれる“師”との出会いを果たしていた。これらの経験は、「最初は夏休みの時だけに行こうと思ったコースだったのに、10年間結局ずっと通ってたんです」、「国の大学院に入ろうとしたんですけど」などと語られ、かれらとの出会いや、受けた教えは、当初は予期できなかった印象的な出来事として留学を後押ししたことが語られた。師と出会ったことが、現在につながる特別なものとして価値づけられていることがわかる。

〈家族との信頼関係〉

・（鈴木：日本の大学院に進学することに対してご両親やご家族は何か言ってましたか。）あっさりと許してくれました。お金の問題も心配しなくてもいいと言ってくれました。（佳君）

・（教師だった）おじいさんの影響も多かったし、おじいさんは教師の仕事に対して尊敬感を持っていて、私が子どもを教えたいとか気持ちを（持っていることを）知ったところ、じゃあ私の孫がそういう人になるなら私は幸い、とかいう発言があったから、（記憶に）残ってたので、一応子どもの頃ずっと教師になろうと思いました。（ターニャ）

日本の大学院に進学して教育を受けることについて、留学生が家族からの精神的な支えを受けていたり、家族が留学生の向学心を信頼していることがわかる語りである。なお、この概念は、研究対象の留学生が家族との間に何ら摩擦なく留学を果たしていることを示すものではなく、一時的な反対を受けても、納得させられる関係を家族との間に得ていることを示すものである。例えば桂花さんは、仕事を辞めて日本の大学院に留学することについて、当初は両親に反対を受けたが、説得したことを以下のように述べている。

・日本へ留学して帰っても有利です（と両親に言いました）。仕事を探すとき。私は帰って就職するときも役に立ちます。それは1（つ目の理由）です。2（つ目の理由）は、経済のほうは自分でやります。お金はいらないよって（言いました）。あと、1年間で私がもし大学院に入れなければ帰ります。そのときは両親が言ったこと全部聞きます。言った通りやります。そのように約束しました。約束するとき、このようなことを絶対に起こさないように頑張りますよね。約束します。やらせてください。その気持ちで相談したことあります。（桂花）

この語りの後で桂花さんは、大学院合格を告げたときに両親から祝いのメッセージを受けたことを語っている。桂花さんの留学の実現が、家族との関係を強化する機会になり、桂花さんの自信につながっていることがうかがえる。程度や現れ方に差異はあるが、留学生には、留学して教育を受けること、学び続けることが家族によって支持されたという背景があることがわかる。

【留学中の生態環境】のカテゴリーを総括すると、総じて、女性の大学院留学生は自分の向学心を肯定的に認識しており、留学を、家族関係の確認や更新の機会としながら、師の方向づけを手掛かりにして留学を果たしていることがわかる。特に、言語を使って師や家族との関係を強固に形づくっており、他者、家族との間で自己の目標を見出す生態環境を構築してきたと言える。

【留学中の生態環境】

次に、【留学中の生態環境】のカテゴリーについて述べる。このカテゴリーは入れ子型になっており、【生態の加算的な状況】と【生態の減算的な状況】の2つのカテゴリーが内包されている。この2つは対のカテゴリーと考えられる。なお、ここでいう「加算」「減算」とは、時間の経過に沿って様相が好転していくことと、逆に、弱体化していくことを指している。

【生態の加算的な状況】のカテゴリーには〈研究上の発達〉と〈研究上の不安〉、生活者としての発達と〈生活者としての不安〉の4つが、【生態の減算的な状況】のカテゴリーには〈ライフステージ上の課題〉と〈ライフステージ上の自立〉、〈経済的課題〉と〈経済的自立〉の4つの概念がそれぞれ対照的な意味を持つ概

念として存在する。

【生態の加算的な状況】

このカテゴリーに入る〈研究上の発達〉と〈研究上の不安〉、生活者としての発達と〈生活者としての不安〉の4つの概念は、研究生活の入り口に立つ学生としての、そして日本生活者としてのあり方に関連する。母国を離れ一人で大学院生活を始めるにあたっての困難が、次第に改善され、解消していくプロセスが見えてきた。

〈研究上の不安〉

・(もっと遊びたい、勉強したくないという気持ちになることも)ときどきあります。でもその時が過ぎたらもうやはり勉強のほうが重要だと。遊びの時も勉強のことばかり考えてます、私は。(佳君)

・勉強はすごく重く感じる。(中略)大学院に入ってから、新しい環境の中でどうやっていけばわからなくなった。その時は勉強も新しい知識になって、予習とか自分で勉強しなければならないです。(桂花)

・課題で5つの文献を紹介しなさいというのがあったんですけども。5つの研究を紹介するのであれば自分がしっかりしたレビュー論文の形でしたいというのもあって。5月末までに研究しないといけない。それを提出しなかったんです私は。できなくて。(秋月)

留学生は日本の大学院で、母国でも経験したことのない学びの内容、方法に向き合う。引用した語りでは、新しい知識、予習、レビュー論文などが、これまで母国でやってきた学習にはない新しさ、重さを持つものであり、本研究で研究対象となった留学生が多くの時間を費やしてこれらに取り組んでいることがうかがえる。その試行錯誤は楽なものではなく、秋月さんは課題を達成できなかった経験を述べている。このように、留学生にとって課題は重く、常に念頭に置かれ、プレッシャーの下でアカデミック・ライフを送っていることがわかる。ただしこれらの不安は、次の概念でみるように、大学院生活への慣れや、仲間や先輩との出会いなどによって、徐々に解消されていくことがわかった。

〈研究上の発達〉

・ゼミ生がすごく、もう本当に先輩すごかったのね。(中略)研究で議論しているときは怖いですよね。「秋月さんそれ甘いよ」とか出てくるし。いろいろ出てくるんですけど、ゼミの外で話すと、研究と関係なくて本当に優しいんですね。(秋月)

・(鈴木:8月に帰るの?)帰れない。ちょうど投稿論文のあれ(締切)があって3年間で卒業できるかわからないんですけど、それを目指してるので3年間で(博士課程修了を)目指すのであれば今年はたぶん勝負だろう。(秋月)

・(鈴木:娜莉さんは大学院に入る最初の目的は博士まで目指してましたか。)最初は目指してないですね。入ってから先生との共同研究とか教育実習の研究とかいろいろやって、私データ収集とか、けっこう数も収集したんですね。(娜莉)

娜莉さんと秋月さんの語りから、周りの先輩やゼミ仲間などに刺激、鼓舞され、研究を進めていることがわかる断片を抜粋した。先に紹介した〈研究上の不安〉は永続するものではなく、大学院入学後、ゼミの先輩や仲間との切磋琢磨によって解消されていくものであることが、この概念によって裏づけられる。〈研究上の不安〉は、娜莉さんが「入ってから先生との共同研究とか教育実習の研究とかいろいろやって」と語るように、最初の想定以上に研究が進展したことによって解消した部分があるようである。秋月さんが「3年間で(博士課程修了を)目指すのであれば今年はたぶん勝負だろう」と、自らにプレッシャーをかけて「勝負」と表現するように、本研究で研究対象となった留学生にとって研究は、正面から取り組むべき挑戦であり、留学前から保持していたと考えられる向上心とも結びついて研究上の発展につながっていく過程をたどることがわかった。

多くは日本語で課される課題は、留学生に言語的な負担を強いるものであるが、本研究で研究対象となった留学生は他者との関係を築くことによって、よくこれを乗り越えているといえよう。次に紹介する、〈生活者としての不安〉と〈生活者としての発展〉も同様に対の関係である。外国人として日本の言語環境に入り、留学生は困難を感じているが、これも時間の経過によって改善されていく傾向が見られた。

〈生活者としての不安〉

・来学期からは就職とか(を考えなければならないため)、ますますたぶんアルバイトする時間がなくて、この(夏休みの)2ヶ月間にはなるべく、来学期のお金を稼いで。(鈴木:アルバイトとか研究以外で、日本の生活、何かこれをしてる、とかありますか。)ほぼないですね。(鈴木:本当はもうちょっと、こういうことしたいというのありますか。時間があったら。)そうですね。時間があったら例えばいろんなところに旅行に行ったりとか、見たりとか、海外の旅行とかも行きたいですけど、お金に余裕もないし、時間もないし、全然できない。(娜莉)

・今だと院の友だちとの付き合いが短いので、私の性格は、付き合いが短いなら自分のことはあまり話さない性格だから、悩みがあったら誰に相談するのか全然わからないです。（中略）私はずっと部屋にこもっているタイプなので、友だちの誘いがないと遊びにいかないから。だから日本にいると、本当に毎日部屋にいます、ずっと。遊ぶ数も減ってきました、台湾のときより。（佳君）

留学生は、四六時中大学院にいるばかりではない。アルバイトや余暇の時間も過ごす、生活者の一面も持つ。ところが娜莉さんは、研究やアルバイト以外に生活を楽しむ時間もお金もないと語っている。また佳君さんは、故郷の台湾での人間関係から切り離されてしまい、日本での日の浅い友人関係ではうまく自分のことを話すことができず、相談相手もおらず、部屋にこもりがちになることを述べている。このように、生活者として日本生活を楽しもうとしても、不如意である状況が語られた。

〈生活者としての不安〉は時間の経過に伴って、状況が好転する傾向が見られたが、その度合いは個人差が大きいように思われる。次の概念で見るように、経済状況と密接な関係がある。

〈生活者としての発達〉

・（来日して）最初はアルバイトを探すのはすごく難しかった。日本に来て（日本語を）あまり話せないし、聞くのも、日本人のスピードは私にとっては速い。（中略）でもその時は、私は話さないとどうやって仕事を探せばいいですか。それはまずバイト情報誌を見て練習した。バイト情報誌を見て、電話をかけるとき、どのように話せばいいかを教えてあるので。（中略）電話をかけた時は採用されました。（桂花）

・（鈴木：今の生活の中でも勉強や研究だけではない生活も大切にしてますか。）してますなるべく。バランスをとりながら。スポーツはかなり大きな役割を果たしています。ダンスとヨガとか。これ今日は持ってきたんですけど（ターニャさんのダンスレッスン中の写真が載ったダンス教室のチラシ）。（ターニャ）

この概念では、アルバイトや地域のダンス教室などの場で言語をうまく機能させることが、生活者としての発達につながっていることが語られている。桂花さんは、来日直後にアルバイト探しに苦労しながらも、バイト情報誌に電話のかけ方が書いてあることを知り、練習してその通りに話したことによって採用されたという体験を語った。桂花さんは「話さないとどうやって仕事を探せばいいですか」と述べ、日本語が難しくても、挑戦しなければ仕事が手に入らないという状況を認識して、自らを奮い立たせている。この語りの後で桂花さんは、アルバイト先の人間関係に恵まれ、日本語を教えてもらうこともあり、勉強になったと述べている。また、ターニャさんは、「バランスをとりながら」生活すると述べ、地域のダンス教室に通うことで生活のリズムを作っていることを語っている。ターニャさんはインタビュー時にたまたまその日受け取ったという、ダンス教室のチラシを筆者に見せてくれた。それは、レッスン中のターニャさんの写真が小さく掲載された教室の生徒募集のチラシであり、ダンス教室の一員として存在感を示していることが筆者にも伝わってくるものであった。

【留学中の生態の減算的な状況】

このカテゴリーに属する〈ライフステージ上の課題〉、〈ライフステージ上の自立〉、〈経済的課題〉、〈経済的自立〉の４つの概念を見ていく。前述の【生態の加算的な状況】では、時間の流れが解決するという道筋が見えていたのに対し、こちらでは逆に、時間が流れるほど構造的な問題が露呈する方向へと進むプロセスが浮かび上がった。

〈ライフステージ上の自立〉

・今、忙しくて一人で過ごす時間は足りてない。そういう感じがありますが、自分のためにはそれは欠かせない条件、発達するための欠かせない条件と思って、わざとなるべく出かけたりコミュニケーションをとったりしています。（鈴木：発達するため。）発達するためとか、実は怠け者だし、私。本来はそういう人だと、自分のことそう思ってるんです。（中略）なるべくわざと（人と一緒に過ごすことを）やってるんです。今は頑張ってます。（ターニャ）

・（留学する前、両親から）「そろそろ結婚する年齢になるので、（留学せずに中国で）のんびり生活はいいじゃないですか。日本に来ると苦労しますし、もし何にも結果できない、見えないなら、たぶん後悔するよ」と言われたことがあります。（中略）（鈴木：そういうことに対してプレッシャーある？）全然ないです。女の人は結婚は生活、人生の中は一部分だけじゃないですか。そんなに早く結婚しなくてもいいじゃないですかと考えました。30歳くらいで結婚すればいいと思って。あとは仕事とか自分は生活できるなら、結婚するかどうか関係ないと思います。生活をうまく回せれば、結婚しなくても女の人は大丈夫と思いました。（桂花）

当然のことであるが、留学中の留学生にも時間は流

れる。彼女らは自分の20代の数年間を日本で留学生として過ごしており、その年代における自分の発達課題に取り組んでいる。ターニャさんの場合は、「発達するための欠かせない条件と思って、わざとなるべく出かけたりコミュニケーションをとったりしています」と、本来一人でいることが好きなのに、自分の成長に必要なこととして、あえて人と一緒に過ごしていることを述べている。他方、桂花さんは、両親が望む母国での結婚やのんびりした生活を拒否し、「30歳くらいで結婚すればいい」、「生活をうまく回せれば、結婚しなくても女の人は大丈夫」と述べている。桂花さんは、親の考える安定した生活ではなく、自分独自の結婚観、仕事観を確立することによって、親からの自立を図っている奮闘の最中であることがうかがえた。〈ライフステージ上の自立〉とは、次の概念で表れているように、課題をどう克服するか、自分なりの折り合いのつけ方でもあり、本研究で研究対象となった留学生はその渦中で逡巡していることが見えてきた。

〈ライフステージ上の課題〉

・(結婚について) けっこう言われます。だってもうそろそろ30歳だから(結婚相手が)いないとダメとか。(鈴木：国の人に？) 国の人に。向こうは今、私の年齢に入るとみんな結婚してる。子どもいる家庭もあって22歳、23歳でみんな結婚しちゃうから。特に親戚が多いですね。「何してるの、海外で何してるの」って (言われる)。(中略) 特に、「言語の仕事をやってるよ」って言ったら「それで何になるの」みたいな。(秋月)

・(鈴木：働くことについてどういうイメージを持っていますか。) 働くのは大変。私は社会経験がないから一度だけでも普通の会社に入りたいです。私はもう17歳の時からずっと日本語をやってきたので、他のこととか他の世界を全然知らなくて、それがよくないことだといつも思ってます。(鈴木：よくないことっていうのは。) もし本当に日本語だけを勉強したら、物ごとはいろいろなところを見ないと本当に成長できないと思います。私の大学の友だちもみんな働いて、みんなの今の状況を聞いてて、それも一度経験したほうが一人前の大人になった感じが強くなります。今はまだ (私は) 子どものような感じで。(佳君)

秋月さんの語りでは、母国の同年代の人々が結婚し、子育てをしている人もいるのに、自分はまだしていないことが、母国の価値観では異質に捉えられがちであることが述べられている。〈ライフステージ上の自立〉の概念で、桂花さんも「30歳くらいで結婚すればいい」と語っていたように、30という年齢が女性の大学院留学生にとって大きな意味を持つことが語られた。秋月さんの場合も30歳が目前に迫り、親戚たちの声が看過できないものとして響いていることがわかる。秋月さんが日本で博士課程の学生として言語の研究をしていることを伝えようとしても、母国の人々にとっては、その専門性が想像しづらく、学問の価値も伝わりにくいことが、秋月さんの悩みであるようだ。

佳君さんが就職に対する思いを述べた語りは、焦りが伝わるものであった。日本に留学し知識を深めた反面、「他のこととか他の世界を全然知らなくて」と、現状の自分に不足を感じていることを述べている。大学時代の友人たちが現在、既に社会人生活を始めているのにもかかわらず、まだ社会人のスタートを切っていない自分を「今はまだ子どものような感じ」であり、「一人前の大人」ではないことを強調している。

これらの語りからは、本研究で対象となった女性の大学院留学生が母国での価値観をそのまま今の自分の状況に適用していることがうかがえる。そして、その価値観が強いあまり、相手を説得できない自分、価値基準を満たしていない自分に対する評価が低くなることが推測できる。

〈経済的自立〉

・母は、「学費はどうだろう (足りているか)」と聞いたことあります。学費。私は、受験試験は勉強してもお金はないと (大学院に) 入れないと思って、毎月少しずつ貯金しました。(来日から大学院に入るまでの) 1年間。計画的に。1カ月これくらい貯金すれば、もし合格すれば入れる。お金は足りるということで。(鈴木：かなり節約して生活してた？) そうです。節約して。洋服とか買ったこともないし。生活は食べるものだけ。(桂花)

・日本に来てから、アルバイトしながら教育を受けている (留学生の) 姿を見てびっくりしたんですが、私は自分でそういうような生活ができるかと思ったら、やはりできないとわかってたんです。(鈴木：それはどういうことですか。) それはやりたくないって、自分の経験の影響かもしれませんけど、大学卒業してから私もいろんな企業で働いてたし、かなり給料が良かったんです。いい生活に慣れてきたんです。そしてずっと両親と一緒に住んでいたので、経済的に困ったことを感じた経験はあんまりなかったんです。(中略) 日本に、全く知らない国に行って、仕事と勉強以外のことをできないという形は全く私にとってありえない

状況で。（中略）知らない国に行くとしたら、旅行したり、その国についてもっと知りたいんですよね。だから旅行でも美術館でも劇でも、いろんな交流をしたいので、人との交流をしたいから、それはお金がかかるんですよね。仕事と勉強だけやるなら、それは全部できなくなっちゃいます。つまらない生活がやりたくないから、私費で行きたくなかったんです。（ターニャ）

留学中の学費や生活費など、経済的にどう自分の生活を支えるかが留学生の課題となる。インタビューでは、母国では親に経済的に頼っていた留学生が、留学を機に、独自の生計を立てるべく自立の方法を模索している様子が語られた。桂花さんの場合は、アルバイトをして節約することで日本での大学院生活を実現し、ターニャさんの場合は、国費留学生になることで、留学中の自分の生活を成り立たせることを選んだ。

一方、この概念で語られる〈経済的自立〉とは、あくまで留学生である間の、当座の経済面をどうするかでしかない。留学を終えた後の経済面の自立までは語られておらず、留学を終えた後の懸念の解消はされていないのである。そのため、次の〈経済的課題〉という概念が浮上する。

〈経済的課題〉

・悩む時はあります。両親に言って、仕送りちょっとだけでもいい（から欲しい）と思っているんだけど、なかなか勇気を持てないです。電話をかける勇気。両親に「ちょっとお金ください」（と言うこと）、それはできないです。なぜできないか今はわからないんだけど、でも自分が決めたことに他の人がもしお金を出すと、自分の決めるものではないんですね。援助をもらってこのことは達成しました。私の留学は自分の力で達成しようと思って。だから負けたくない。（桂花）

・彼（夫）の両親はこっちの大変さ、たぶんあまりわからないですね。（夫の両親は）もうちょっと家にお金を送ってほしい（と思っている）。中国の考え方だと今の時期だと（夫の年齢は）34ですね。子どもとか部屋とか車とか全部そろえたのが成功の模範。でも2人は何もない。これが(夫の両親には)考えられない。「なぜ何もないの」みたいに（言われる）。私が博士（課程）に行くのもあまり支持がなくて。（中略）5～6年くらいは日本で働いて。（中略）5～6年経ったら、この間に子ども産んで。もし経済的に余裕があったら、博士行くか（と今は考えている）。（鈴木：厳しいよね。）厳しい。その理解がもらえないのが。私は一気に博士まで終わるように（したい）。その間に子ども産んでとか何とかやって。これもできるよと、でも（夫の両親には）信じられない。経済的に保障ができないです。普通の夫婦だったら、私の年齢だと2人とも共働き。そのような感じだと、環境だと、けっこう余裕がありますね、経済的に。例えば子ども産むのか、部屋買うのか。けっこう余裕があるからっていうのがあって。（娜莉）

先に挙げた〈経済的自立〉の概念と考えあわせてこの概念を見ると、留学生の経済的な自立がかなり限定的なものであることが見えてくる。節約生活をして大学院に入学した桂花さんも、両親からの仕送りを希望しつつ、「私の留学は自分の力で達成しよう」という意気込みから、親からの援助は受けないという選択をしている。娜莉さんは、博士課程に進学したいという希望を持っているものの、中国での規範では、娜莉さんら夫婦の年齢では、共働きをし、住居や車を買い揃え、子育てしているべきであるという考え方が根強くあるせいで、夫の両親から理解を得られていないことを語った。

〈経済的自立〉の概念でみたように、留学中の生活は、節約やアルバイト、奨学金などで切り回せても、その後の生活の保障はない。経済の自立が限定され、制約のあるものになる理由である。

〈期限付きの留学〉

この概念は、留学生が留学を終わらせることに対する納得のつけ方を示した語りからなる。留学の終結を見据えての認識が語られた。

〈期限付きの留学〉

・今回は修士を修了して、絶対帰りたいんです。それはロシアの状態にも経済的な状態にも関係があるし、これからまた博士に行くなら3年間で、ずっと日本にいなければならないんですよね。そして帰国するのは30歳以上になるわけです。（仕事の経験もなく）30歳になったら、昔の経験しかない人として、どこに置かれるか、それも心配があるし、そして今のところロシアでは、外国で獲得した博士号とか修士号はまだまだ認められてないので、博士まで行きたいんですけど、それはロシアに戻ってまた改めて大学に入ってとろうと思ってるんです。（ターニャ）

・博士に行こうかなと思ったんですけれども、全然経済的余裕がなくて、先に仕事（をすることになりそうです）。しかも彼（夫）も（博士課程進学に）反対で。（鈴木：そうなんだ。）うん。彼の反対の理由は、お金が一つの問題ですね。けっこう年取ったんで、私がもう27だから、中国の計算だと28ですね。彼がもう

34。だから、何か子どもを産むとか部屋を買うとか、すごく今やる時期みたいですね。(娜莉)

・(鈴木：こういうところに就職したいって希望はありますか。) 台湾に帰った後でできれば先生になりたいです。塾の。(鈴木：日本語学習塾みたいな。なぜですか。) 自分が教師の免許を持ってるのが理由で (中略)、塾で日本に留学する目的の人を教えたいです。(中略) (鈴木：日本で就職することを考えたことはありますか。) ないです。(学部生の) 交換留学の時にも日本で生活は私には合わないかなと思いましたから。物価が高いとか民族性のいろいろな感じだと。(中略) 人との付き合いが難しいです。私にとって難しすぎるからもう日本で就職をしたくない。(佳君)

ターニャさんは修士課程までで留学を修了する理由を3つ述べている。ロシアの経済状況、30歳までに仕事の経験を積みたいと考えていること、外国で獲得した学位がロシアでは認められにくいことである。娜莉さんの場合、経済的な理由が第一に挙げられ、それに関連して年齢がネックであることから、〈経済的課題〉の概念でも述べたように、先に就職を果たそうとしていることを述べた。ターニャさん、娜莉さんの帰国理由は、〈ライフステージ上の課題〉や〈経済的課題〉に関係が深いと言える。他方、佳君さんの場合は、物価の高さ、台湾との民族性の違い、人間関係の難しさなど、日本生活そのものに対する困難に結びつけて帰国理由を語っている。この語りからは、〈生活者としての不安〉の概念が帰国を決める引き金になっているように解釈できるが、〈ライフステージ上の課題〉で引用した佳君さんの語りで見たように、就職して自立したいという希望を持っていることも一因と考えられる。帰国を決める要因は一つではなく、【留学中の生態環境】での経験を複合的に認識した結果であると言えるだろう。

考察と今後の課題

今回インタビューした5名のうち、研究や経済上の負担等に耐えかねて留学継続を断念した者はいなかった[*1]。だが彼女らの生活は順風満帆というほどではなく、程度や内容は違えど、全員が何らかの困難な事情を抱えた上で、日本での留学生活を送っていた。本研究での研究対象の女性の大学院留学生の留学の困難の根源にあるものとして本研究から見えてきたのは、母国でのマスターナラティブの強さである。マスターナラティブとは、ある社会や時代に支配的な語り方やストーリーのことで、文化的慣習や社会規範、イデオロギーを表現するものである（桜井・小林 ,2005：178、183-184)。彼女たちの自己評価には、母国で一般的とみられる規範、言説が適用されていた。そしてその結果、将来像やライフステージで取り組むべき課題が、母国での規範にあてはめて考えられ、未婚であること、就職していないこと等が懸念となって感じられている傾向が見えた。このように母国のマスターナラティブ下での規範や価値観が保持される一方で、学位や専門性など、彼女たちが日本で追求していることについては、必ずしも母国での高い評価とは結びついていないことがうかがわれた。このことと併せて考えたいのは、今回調査した女性の大学院留学生の留学前の生態環境が良好なことである。つまり、留学という経験が、短期的には女性の大学院留学生の自己評価の向上に寄与しないことや、母国で良好だった生態を脅かすことも起こり得る。

そこで、女性の大学院留学生に対するどのようなサポートが可能かを改めて考えてみたい。従来、留学生に対しての支援は、アカデミック面（チューター制度)、経済面（授業料減免、奨学金）に向けられてきた。これらは、留学生が留学を遂行する期間の支援ということができる。本研究の結果、アカデミックな不安は時間の経過によって解消する傾向が見えてきた。大学院が提供する支援や、ゼミなどのシステムが留学生の学業継続に有効に働いていると推測できる語りも本研究でのインタビューで聴かれた。他方、経済的な面の不安は留学中もさることながら、留学生の立場を離れた後にもあることがわかった。本研究の対象者においても、留学中は何とか切り回せても、その後の生計をどうするかを考えたとき、博士課程進学ではなく、帰国、就職するという選択肢が選ばれるようであった。日本の大学院博士課程を修了した女性の専門人材の育成という観点から考えれば、今後は、留学中のみならず、留学後も見据えたサポートを考えていく必要があろう。大学院修了後もカバーする奨学金のような経済的な支援があれば、留学生にとって心強いことは当然であるが、すべての留学生に対して奨学金を提供することは現実的には考えにくい。そこで、何が女性の大学院留学生の良好な生態を形づくることにつながるのかを、女性の大学院留学生と共に探るアプローチを目指したい。その一つとして、女性の大学院留学生が留学中に生態を良好に維持していくモデル例とはどのような姿なのかを考えることを課題として挙げておく。今回の研究対象のインタビューからは、5名の研究対

象者いずれからも、日本に滞在する女性の大学院留学生として追随したいモデルケースは語られなかった。もし、そうしたモデルが身近にあれば、女性の大学院留学生が自らの留学生活と、留学後の生活をイメージする上で有益と考えられる。そこで今後は、どのような例が、女性の大学院留学生のロールモデルとなりうるのかを検討していきたい。

本研究の結果は先述したように一般化を目指したものではなく、日本語教育とその周辺領域を専攻とする5名のインタビューからの結果である。そこで今後は、他の領域を専攻とする場合、特に、英語など他の言語を用いて研究を遂行する場合なども視野に入れつつ、女性の大学院留学生の、より多面的な調査が必要である。

注

1）その後、ターニャさんと佳君さんは修士課程修了後に帰国し、桂花さんは博士課程に進学、娜莉さんは日本企業に就職した。秋月さんは博士課程に在籍中である。

付記

本研究は科学研究費補助金（若手研究（B））「共生社会の構築に資する持続可能性教育としての日本語教師養成プログラムの開発」（代表者：鈴木寿子）の助成を受けたものである。

参考文献

Cranton, P.（1992）Working with adult learners. Toronto: Wall & Emerson. 入江直子・豊田千代子・三輪建二訳『おとなの学びを拓く―自己決定と意識変容をめざして』鳳書房.

Cross, P.（1981）Adults as learners. San Francisco: Jossey-Bass.

Haugen, E.（1972）The ecology of language, Stanford, California : Stanford University press.

岡崎敏雄（2009）『言語生態学と言語教育―人間の存在を支える者としての言語』凡人社.

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂.

国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・2009年（概要）』国際交流基金

桜井厚・小林多寿子（2005）『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門』せりか書房.

鈴木寿子・張瑜珊（2011）「長期留学中の大学院女子留学生の語り―断絶の感覚をうみだすもの」『ジェンダー研究』14,53-70.

総務省統計局（2013）「学校基本調査年次統計：平成25年度：高等教育機関《報告書掲載集計》専攻分野別外国人学生数（大学院）」
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/Xlsdl.do?sinfid=000023610160 ＜2014年1月17日アクセス＞

西尾亜希子（2003）「英国大学院で学ぶ日本人留学生の動向―ジェンダーの視点から」大阪女学院短期大学編『大阪女学院短期大学紀要』（32）,113-125.

日本学生支援機構（2013）「平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果」http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html ＜2013年11月15日アクセス＞

文部科学省（2008）「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめの考え方」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.htm ＜2013年11月15日アクセス＞

文部科学省（2014）「グローバル30」
http://www.uni.international.mext.go.jp/ja-JP/global30/ ＜2014年1月26日アクセス＞

山田泉（2005）「多様な日本語教育の展望と社会的課題克服への貢献」『日本語教育』124，3-12.

早稲田大学日本語教育研究科2013-2014パンフレット
http://www.waseda.jp/nyusi/ebro/gs/gsjal_jp_2013/index.html#page=1 ＜2014年1月26日アクセス＞

2013年11月27日　　受稿
2014年　2月21日　査読受理